

第 27 回 番組審議会議事録概要

1. 開催日時

令和 6 年 12 月 2 日 (月) 午前 10 時 30 分より

2. 開催場所

東京都港区台場 2-4-8 フジテレビ本社 会議室

3. 出席者

委員長 : 吉岡忍

委員 : 渡邊健一、池田哲雄、宮崎美紀子、砂川浩慶、笹田佳宏、長谷川晶一

株式会社サテライト・サービス

石井浩二、永竹里早、窪田正利、落合祐輔、武井俊人

株式会社フジテレビジョン

門澤清太

JCOM 株式会社

斎藤弘之

ワーナーブラザーズ・ディスカバリー

高山真詩、小林誠

4. 議題

1) 「エバーグレイズの守り人」 # 1 繁殖期の前に

アニマルプラネットにて令和 6 年 11 月 8 日放送

2) 「武豊 TV! II」 # 1 5 6 凱旋門賞プレイバック

フジテレビ ONE スポーツ・バラエティにて令和 6 年 10 月 27 日放送

3) その他 報告事項

審議に先立って石井社長から以下の報告があった。

- ・今年 9 月に長く番組審議委員を務めていただいた杉浦克昭様がお亡くなりになった。この場を借りてご冥福をお祈り申し上げたい。

議題番組について各委員から次のような意見が出された。

■ アニマルプラネット 「エバーグレイズの守り人」について

- ・ 30万匹というヘビの数は信じられないが、蛇のハンターがいることにもっと驚いた。世界には本当にいろんな人がいるし、アメリカにもいろんな人がいるなど感じた。
- ・ 蛇が泳いでいる水中映像の撮り方、また蛇がなかなか出てこず、恐怖を煽るようなシーンの作り方は見事。最後に蛇を捕まえて頭を銃で撃ち抜くカットで、弾丸放った時に鳥がバーッと飛ぶ、ああいう演出効果は面白いと思った。
- ・ いろんな自然の動物が出てくる中で鳥がよく映る。蛇は鳥の卵を木に登って食べてしまうので、鳥を守るというテーマを表現するために、あれだけの鳥の映像が出るのかなと思いつながりながら見た。
- ・ 画面の切り替わりがずいぶん早く、目まぐるしくシーンが変わるため、後で撮り直しているように思えて、本当に彼らが蛇をハントしているのか気になった。体に蛇が巻きつくところも、わざと巻き付けているように見えて、自然の素敵な映像が撮れているだけに、実際にハントするシーンは演出のようで気になる。また車が壊れてしまい、代わりに車を借りに行くときに、お金の交渉する場面もこの番組に必要なのかなと思った。
- ・ ハンターのバックグラウンドや、年間何パーセントが駆除できたなどの情報をテロップだけでも説明した方が、視聴者の理解は進むし、番組にファンも増えるのでは？
- ・ 30万匹までに増殖していく過程もよくわからなかったし、その換金システムの説明もよくわからなかった。さらにペットを無責任に捨てることによって繁殖してしまうという、取って付けたようなメッセージも含めて、詰め込み過ぎの雑多な感じだと思った。
- ・ 初めは自然環境を守るとか、動物を保護するといった教育的な番組かと思っていたら、完全にこれはならず者たちが好き放題に暴れまわる番組で、娯楽としては楽しい。「俺たちがまたエバーグレイズの自然を守った」とか言っていたが、多分これは金儲けのためだけにやっているのだろうなと思ってしまいました。
- ・ 日本人がこの番組を見る意味は何だろう、何を楽しめるのだろうと考えた時に、一つは人類の歴史といった永遠普遍のテーマが見えてきて、その部分はとても良質に十分伝わっていると思った。もう一つはアメリカ文化について考えることができる番組だと思う。日本とは圧倒的に違う文化なんだな、アメリカ人って多分こういう人たちが好きなんだろうな、というのはよくわかる。
- ・ ちょい悪おやじが、気の合う仲間と楽しくやっている番組として見てみると、本当に楽しい。その中に自然を守るといふ何かメッセージのようなものが入っている番組なのかなと思った。本当にアニマルプラネットの番組というよりは、エンターテインメント要素の強い番組だと思った。ただ一方で、1回目の放送しか見ない人のことを考えると、2回目以降に繋げるためにいろんな要素を一生懸命盛り込んだ結果、ちょっと1回目の放送だけでは散漫な印象をもった。

- ・ 日本にはない番組だ。こういう存在もないし、事象自体もない。やっている方たちは命かけていのはよくわかるが、これはエンターテインメントだと思ってみました。
- ・ エバーグレイズ国立公園はハリケーンでひどい目に合ったり、また周辺の都市化と住宅化によって生活排水が流れ込んでいて危機遺産に指定されたりということが起きているので、今どうなっているのかな？ということも気になった。
- ・ エンタメなのか、ドキュメンタリーなのかは難しいところだが、作り方としては、日本のドキュメンタリーとはずいぶん違う。ものすごくカット割りが短いいし、ワンフレーズをスピーディーに積み重ねていって番組を作っている。アメリカの製作者が視聴者に対して「教えてあげるよ」というスタンスなのに対して、日本のドキュメンタリーは「一緒に考えましょうか？」っていうスタイルが多い。そうすると編集の仕方、撮影の仕方も違ってくるし、組み立て方も変わってくる。それがいいとか悪いという話ではなく、製作者が自分たちをどう位置付けるのかということだと思う。

委員からの意見に対し制作サイドから

(ワーナーブラザーズ・ディスカバリー 高山真詩氏)

- ・ この番組が制作されたのは 2019 年で、当時は確かにフロリダ州にも何十万匹もニシキヘビがいたが、この番組中で描かれているようなハンターチームが一生懸命駆除することによって、だいぶ最近ではその数は減ってきていると言われている。アニマルプラネットは動物専門チャンネルなので、自然保護や生態系を守ることを描いている番組として、編成する価値があると考えた。
- ・ 彼らの考え方、アメリカ文化というものを考えさせられる番組だというご意見は本当にその通りで、「こういう世界もあるのだ」と、日本の視聴者の人に楽しんでもらいたい。彼らが銃を使わないのは「蛇に痛みを与えたくない」から、また裸足で湿地の中を移動するのも自然と一体化するような感情を得るためだと、あるネット記事のインタビューで彼ら自身が語っており、本当はそうした部分も番組内で描くことができればよかった。
- ・ その一方でどれだけ蛇を捕まえることができたか、どれだけ彼らが稼ぐことができたかといった具体的な説明はなく、ドキュメンタリー番組としては確かに物足りない部分はある。とはいえ、この番組は蛇を素手で捕まえる荒くれ者というか、無茶をする命がけのハンターの姿を描くという、どちらかというドキュメンタリーというよりも、非常にエンタメ性の高い番組であると思っている。確かにテロップなどで補足の情報を入れるという手法もあるが、そもそも字幕番組で出演者の会話を字幕にすべて出している中で、同時に複数の字幕を出すのは難しい。
- ・ 確かに一話目の放送だけだと、彼らの背景が十分に描かれていない。日本のドキュメンタリーと違い展開が早く、そのおかげで最初の放送ではついていけずに脱落してしまう人もいるかもしれない。ただザッピング的に見ている人にとっては、このようにどんどん切り替わっていくことで、途中からでも番組に入っていける部分もあるのではないかな。

■フジテレビ ONE スポーツ・バラエティ 「武豊 TV! II」 について

- ・ 競馬場も行ったことがなく、馬券を買ったこともない全くの素人には内容がわからないと思って見始めたが、淡々と武さんがレースを語っていく姿に見入ってしまい、気が付いたら時間が過ぎ、あとで資料の番組尺を見てこんな長い番組だったんだと思った。細かい補足情報もないが、見ているうちに専門用語も意味が伝わってくる。駆け引きがあったり、馬がちょっと右向いてレースが変わっていったりという解説は非常に面白い。まさに CS の番組、競馬マニア向けの番組だなと思う。
- ・ ただ速い馬が勝つってということじゃないのが、競馬だと感じた。マニアの人はマニアの人で楽しめるし、素人でも競馬の醍醐味が伝わってくる番組だと思う。
- ・ 現役の選手を取材する難しさというハードルを考えると、ものすごく贅沢で、有意義な番組。現役選手であり、しかもトップアスリートである武豊さんと長い間信頼関係を築くことができているという、フジテレビの強さみたいなものを感じた。
- ・ 長年きちんと一つの対象を、定期的に追いつけていることの強みも感じた。情報には即時性が求められるものと、長い時間を経てより価値を増すものの2種類があるが、この番組は両方の価値のある番組だと思う。レース直後のインタビューではその時の率直な感想を聞けるのは間違いないが、ちょっと間を経て俯瞰で見た時に、実はこうだったということが後々出てくることはよくある。この番組はずっと昔から放送されており、間違いなく武豊さん引退後に、より価値が増すと思う。先月のレースをすぐ解説した生々しい発言を、何十年後にまた見てもらって「あのとき、ああ言ってますけど、今はどうですか?」と確かめることもできる。武豊さんの引退までずっと続けてほしい番組だ。
- ・ 本当に武豊さんが淡々としていて、自分の手柄や勝ったものに関してものすごく淡々としている。これって自分が走っているわけじゃなくて、馬が走っているからなのか。この客観性、俯瞰の目っていうところがすごく独特な競技だなと思った。
- ・ 私は仕事の関係で競馬の取材を二年間ほど綿密にやったが、競馬の楽しみは「物語」だと思う。武豊さんは彼ならではの物語性というか、ドラマの主人公みたいなのがあるから、だからこそ周りの騎手も意識するし、アンチ巨人じゃないけれども、武には絶対賭けないっていうファンもたくさんいるんですね。ただ番組にはそういう面がほとんど出てこなかったんで、それちょっともったいないなと思った。
- ・ 私は競馬に全く興味がないので正直言って長く感じた。もう少し短くってというのはできないのかなとは思う。その方が視聴者からの反響もいいのでは。
- ・ これは競馬のファンを増やす番組なのか、それとも既存のファンをさらに耕す番組なのか、教えてほしい。
- ・ 聞き役が武さんの会社所属の福原さんということもあるのか、非常に遠慮がちに聞かれていて、忖度している質問が多い。「もうあそこからさしていくとは思いませんでしたけどね。どうしてあれでいいと思ったんですか?」と煽ってもいいのでは? そういうコメントが何か所もない。物語性をもう一度堪能するには少し演出が足りない。

- ・武さんが許してくれるかわからないが、負けた時に勝った騎手に出てきてもらうのも非常に面白いと思う。
- ・武豊さんには私も昔インタビューもしたことがあるが、非常にスマートな人でよくしゃべるように見えるが決してしゃべらない。現役だからペラペラ勝負のやり方とかを語らない。それをこういう番組にしているのはすごい。とはいえ不親切な番組でもある。競馬は物語が多いスポーツで、どうやってそれを聞き出すかという意味ではやはりMCがわかりすぎている。もっとわからないふりをしないと、彼の言葉って引き出せない。
- ・この番組に限らずターゲットをどう考えるかということは、電波を預かって放送法の枠の中でやっている専門放送局って何なのかということにもつながってくる。みんなプロだから、あるいは玄人だから細かい説明を省く、その限界はどこなのか。もちろん玄人好みの番組は絶対なくちゃいけないし、尖った番組も絶対に必要だと思うが、じゃあ新たなファンを増やさなくていいのかという問題は番組制作者が考えなくちゃいけない。

委員からの意見に対し制作サイドから（株式会社フジテレビジョン 門澤清太氏）

- ・武豊 TV は 2005 年からスタートし、いまはセカンドシーズン。武豊は来年 3 月に 56 歳でデビュー 38 年目、今年 70 周年を迎える JRA 半分以上をリードし続けている。
- ・この番組は意識としてはやはり「視聴者を耕す」に近い。これを見て競馬を始めようという人はやはり少なく、むしろ競馬を知る人がさらに深い興味を持ってもらう番組。
- ・武豊自身は調教師になるつもりはなく、おそらく体が壊れるまで乗り続けたいと言っている。そんな彼が客観的に自分のレースを見て、さながら詰め将棋のように「勝つためにはこの方法を取って、この進路を通して」と解説をしてくれるのがこの番組の強み。
- ・競馬はジョッキーと馬だけで成り立つわけではなく、馬主、調教師、生産者と非常にいろんな人が絡み合っている中で、騎手という立場として話すことのできる最大の内容を語ってくれていると思う。MC がもっと突っ込んで聞いてほしいというご意見もあったが、MC もかなり深い部分を聞き出すように頑張っているとご理解いただきたい。
委員から) 突っ込んで戸惑わせようってことじゃない。MC と武さんの間でも事前に打ち合わせをして、きちんと膨らませた方が、それこそファンも増やせるんじゃないか。その方が武さんもやりやすくなるんじゃないかなというふうに思う。
- ・武が負けたジョッキーの出演も年に一回ダービーのときに放送し、お正月には新年会と題して若手のジョッキーなども出演してプライベートな部分も話す演出も行っている。内面をなかなか本当に出さない人ですが、武豊の素顔をみせる番組も作っていきたい。

次回予定

- ・次回は令和 7 年 3 月開催を予定。
- ・議題はスペースシャワーTV と Mnet で放送される番組の予定

以上